

【第4分科会 「地域連携」】

出席及び報告者：八戸市連合 PTA 副会長 下舘顕太郎

① 会場・規模 :奈良県生駒郡斑鳩町地内 「いかるがホール」 出席者数：約 200 名

② 日程 令和8年8月21日（金）

13:00～13:30 受付

13:30～13:40 開会行事

13:40～14:30 基調講演

14:30～14:45 休憩・転換

14:45～16:20 未来創造作戦会議

16:20～16:30 閉会行事

16:30 終了

③ 内容 ※講師、テーマなどについては別紙本大会資料をご参照ください。

1、第一部 基調講演 概要要約

講師は「マイスター高等学院」という厚生労働省認定カリキュラムを準用した職業訓練と通信制高校を組み合わせた学校を運営している。子どもたちの未来を社会と繋ぐ。その経験と想いから「子どもたちのおかれている環境はどこまでいっても親や大人がサポートして成り立つ。大人が理想とする子どもって誰が考えて動くの？」このテーマを軸に講演が展開された。

1-2 講演内容/印象に残ったこと。（3点～5点）

・講師自身が中卒で社会に出た時に様々な苦勞をしてきた中で気づいたこと、感じたことを元に現代こそ PTA の必要性を説いた。自身の親は教えてくれなかったことを社会が教えてくれた。「子どもの近くにいる大人が頑張っていないのに、子どもだけ頑張れるわけない。それは無理な話です。」この言葉は印象深かった。

・社会的なデータでも家庭環境、親や先生、地域の人との関わり方の違いで子どもが大人になり就職した時の離職率に影響が出たり、就く職業にも特徴が出たりとのこと。この事をもっと皆が深刻に考えることが必要だと感じた。

・子どもは社会を実は感覚的にとても見ている。大人が休みたい、働きたくない、国が悪い、自分は被害者。こうした考え、これが子どもにも伝染し、社会全体に蔓延していく。それを止められるのは PTA のような子どもと社会にいる保護者をはじめとする大人達であるということ。

・大人の責任は大きい。本当に様々な影響を受けて人は育つが、小学生、中学生の時に感じた想いはその子の基礎として根付き、それが仕事ぶりにも反映されることを講師自身、生徒を見て目の当たりにしている。

1-3 まとめ

・私達大人が改めて団結して真剣に考えなくてはならないと感じた。自分の子どものために本当に親としてやっているのか、人任せになってないか？こうしたことを考える機会や、想う大人が増えるとなとも良い。

いつの時代も、国をはじめとする行政のせい、学校のせい、ちょっと気に入らない誰かの子どものせいにしてしまっている人が少なくないと思う。今の時代や制度に不満があるなら、子どもに関わる大人自身が変わって、頑張って動かないと変わるどころか今の環境を守ることも出来ないなど。

結論はシンプルで、結局、子どもたちの希望を育むのには、大人も成長（変わって）して協力すること。

→ 「PTA」としてというよりも「大人」の役割を自分事にして、地域と連携し子どもたちと接することの大切さを再確認させてもらった。この考え方を活かし県 P にも周知したい。

2、第二部 未来創造作戦会議 概要要約

パネリストだけが壇上で話すのではなく、会場全体（観覧者）全員に発言権があり、皆で考えて、皆でディスカッションするスタイル。＝作戦会議という形。

各テーマについて一緒に来場した人、または近くに座っている人と、その場で話し合い出た意見をランダムに発表する。

私は 1 人での参加だったので、同じく 1 人で参加していた沖縄県那覇市の PTA の方と話し合いをした。

2-2 講演内容/印象に残ったこと。（3 点～5 点）

・子どもが高校に行かない。または中学に行かずに働かせてください、と子どもに頼まれた。（例として大工になる、YouTuber になる。料理人になる。など。）のテーマについて議論。発表者は 4 名（和歌山 PTA、長野 PTA、大分 PTA、新潟 PTA など）だった。「子どもの考えた事だから応援したいが、くじけた時のため、自分だけの事情でなく会社が倒産したり、これから AI が発達してどの職業がなくなるかわからないから高校ぐらいまでは卒業しておいてくれと頼む」という意見が多くでた。では「高校まで出たけど皆立派な大人になっているか？」などディスカッションは盛り上がった。正解はひとつではないが、地域による偏りはないと感じた。親の気持ちはどこも一緒。どこまで子どもに子どもだけの責任を持たせられるのか。人生の道しるべは結局大人が示す重要性を皆で考えた。

・次に、学校と地域と PTA の取り組みがテーマで話し合った。実際に行っている取り組み例として、発表があった。

1、沖縄の例：子どもと一緒に毎日登校して挨拶運動毎日やる。そこに地域の人にも立って増えていく。地域の朝の定番活動になり輪が広がっている。（学校規模によるか。地域性も出てくるか。）

2、栃木の例：命の授業（保護者が主催）

生きている鶏や、魚を捌いて命をいただく大切さを問う（調理師免許持ちの保護者がたまたまいた。）また、それを地域の飲食店の人と一緒に調理する大人と子どもの調理実習大会。種類には寄るが実際に出来そう！という意見が多く聞こえた。

・次に「PTA」の実態の話になり、まず会場の出席者の内訳を挙手で調べることに。約 200 人の出席者中、保護者以外の出席者は 5 人だけだった。（市役所職員 1 人（業務として、教師 4 人（自主的に 2 名。業務として 2 名）

PTA の中に先生もいるはずなのに、と落胆するのか、保護者と先生は圧倒的に役割が違うからそれは気にするべきことではない、と、とらえるのか、の話に。コロナ前、今までの PTA 大会ではもっと先生達も参加していたそう。昨今の働き方の考えもあってこの状況なのか。

・もしかしたら、今の時代の流れを汲み、もっと保護者が学校と向き合って付き合うヒントがあるのかも？と感じた。

2-3 まとめ

私達保護者の立場としてやれることの中にじっくり「子どものため」と目線を下げているがもっと同じ大人同士の目線も大切にしていけるのが同志を作り、育てる近道なのかと感じた。

例を一つとっても、八戸市ではこの半年地震が3回もあった。そして熊本の地震、千葉の大雨被害など毎年起こる災害。しかし、この「防災」について、どこまで学校に任せるのか？学校の教員になるための大学でのカリキュラムに「防災」の単位はないとのこと。ということは、これは地域や保護者と共に取り組むべき項目になるのでは。

コロナ以降、全国的に学校の交流 宿泊体験学習まで無くなっている学校も多いそう。例えば野外活動を体験していない子が先生になる。その先生は体験していない事、カリキュラムに無い事は、大抵はしない。無駄を省く。省くとまたその生徒はやらない子が育ち、そのやらない子が先生になる。その循環が進んでいく事になる。

若い先生も楽しいな、大事だなんて思うことを PTA が主導し、先生も楽しい、先生もやりがいを感じるシステム作りもこれからの時代は PTA として取り組むことが必要になってきている。

先生は何もやってくれない、と、否定的にすれば未来が見えない。負担ではなく、壁を減らし、仲間として接することが重要なのかと思った。

社会、学校は、子どもにとっても大人にとっても、どんな受け皿があるかどうかで大きく変わる、変えることができる可能性を感じた。